



2025年11月19日
名古屋商科大学
近藤 祐一

高校までのIB教育と大学での学びの連続 ～名古屋商科大学の事例紹介～

名古屋商科大学では日本語での授業を行う経営学部・経済学部・商学部・国際学部・経営管理課程、英語での授業を行うGlobal BBA (Global Bachelor of Business Administration) 全てにおいてIBスコアを活用した入試を行なっている。さらに、IBスコア32点以上の受験者については一般の奨学金制度とは別にIB奨学金を設け入学試験と同時に選考を行なっている。

この稿では特にGlobal BBAの入試を取り上げたい。このプログラムの入試では特に別枠でのIB入試という形態は採用しておらず、他の教育方式によって応募する高校生と同様に総合評価を行なっている。高校までの成績 (IB predicted score) 、推薦状、応募エッセイ、語学証明書（英語IBの場合は不要）などと共にオンラインでの面接の全てを評価し、本学の特色ある教育との整合性があるか、また本学の教育のミッションのもとに学びと成長の可能性があるかどうかなどにより審査している。学園内にIB校であるNUCB International Collegeを持つ本学では、IB教育がスタンダードであることもあり、単なるスコアだけではなく、高校までの学びを元に受験生がどのように本学が提供するビジネス教育を経て世界で活躍し、世界に貢献するマインドセットを持っているのかを重視した審査している。

ここまで説明からはIB教育を経た生徒の本学へ入試時にはメリットがないように思われるかもしれない。しかしIB教育の最大のメリットは入試の手段といった短期的なものではなく、それは生涯にかけての学びのための教育であり、高等教育においてもその学びの内容や学びの方法をさらに発展・強化させる教育方法が採用されるべきであると考えている。その連續性こそを大学教育において担保することにより、IB生のメリットが充分に活かされると確信している。

本学では、ほとんどの科目でケーススタディ・メソッドが採用されている。教員による一方通行の知識の伝達といった従前の授業方法ではなく、学生が実際の企業で起こったケースを読み、解釈し、批判的に分析し、それを教員や他の学生と共有・討議する授業であり、IB生が培った批判的な思考能力、コミュニケーション能力、リーダシップ能力が試されだけでなく、それらの能力を活用しさらに向上させることが期待される授業形態である。本学に入学した2名のIB修了生にインタビューを行ったが、授業で必要な基本的な知識が多くの場合すでにIB教育によって与えられていたということだけでなく、IB教育の中で培った批判的思考のプロセスやその結果を口頭で他の多様性あふれる教室で学生や教員に伝えたり、レポートなどで伝えるという能力が他の学生と比べて優れていると証言している。IB教育と連續性がある本学のアクティブ・ラーニングを多用した教育方式の授業ではIB修了生には成績面の優位性だけでなく、専門領域の深く・広い学びをさらに可能にしていると考えられる。

インタビューの中ではさらにIB教育によって育まれた卓越した非認知能力についても言及があった。時間管理能力、規律、忍耐力など大学での学びや生活に特に重要である能力が進学後に大きく役立っているとのことであった。多くの場合大学入学と同時に保護者の元を飛び立ち、自律した生活が新しい環

境（大学の授業や友人、さらには国外）で行われる、自己マネジメントが大学や人生での成功につながる。このような非認知能力が不足している学生が増加している今こそ、このような能力をIB教育が育成できることをここに特記したい。

最後になるが、本学ではIB修了生の学びの積み重ねをIBディプロマ取得で止めないことは重要であり、「入試制度のさらに先」をどのように考えるのかが重要であると考えている。